

復刊の辞

島根国語国文の会 会長 岩田 英作

『島根国語国文』は、二〇〇六（平成十八）年の休刊より十六年の時を経て、このたび復刊することとなりました。

もとをたどれば、一九八八（昭和六三）年、島根県立島根女子短期大学に文学科（国文専攻・英文専攻）が増設され、一九九〇（平成二）年には、国文専攻に「島根国語国文会」を設置し、教員の論稿と学生の優れた卒業研究からなる機関紙『島根国語国文』が発行されたのでした。

二〇〇六（平成十八）年の休刊は、大学の再編に大きく関わっています。地域の人々から「女短」の通称で親しまれてきた島根県立島根女子短期大学はその年で幕を下ろし、翌二〇〇七（平成十九）年度からは公立大学法人島根県立大学短期大学部として生まれ変わりました。それにともない、文学科も総合文化学科へと衣替えし、『島根国語国文』の母体である国文専攻も解消となりました。

しかし、物語はそこで終わりませんでした。二〇一八（平成三〇）年には、短期大学部と併設して、四年制の人間文化学部が誕生しました。三〇余年のあいだに、島根県立大学松江キャンパスはその姿かたちを変えながらも、その中で国文の学びは生き続けていました。

「島根国語国文をもういぢどやりませんか」

ある日、短期大学部総合文化学科の教員から声が上がりました。人間文化学部の教員も呼応しました。そこには国語教育の顔ぶれもあって、以前よりもかえって幅が広がりました。

いくたびかの変遷を見届けてきた身としては、ここに復刊の日を迎えることができ、感慨もひとしおです。島根国語国文会の初代会長であった吉川隆美先生は、本年、惜しくも鬼籍に入られました。吉川先生による「創刊の辞」にはこうあります。〈本学が本県文化活動の拠点とならねばならないという使命感に基づいて、ささやかながらも、その拠り所となる機関紙を発刊したい〉先達のご冥福をお祈りしつつ、本誌に込められた思いをあらためて確認しておきたいと思えます。

最後になりましたが、本誌を手にとっていただいた皆様には、心より感謝いたしますとともに、忌憚のない御批正をよろしくお願い申し上げます。

（島根県立大学人間文化学部 教授）